ヒューマニズムへの回帰

経済学部長　姜　　文　源

歴史的な経験から、市場での自由競争に基づく資本主義社会は所得格差を大きくする傾向があることが知られている。格差の拡大はいわゆる勝ち組と負け組を作り出すわけだが、一般に人の数からいうと勝ち組に属する人よりは負け組に属する人のほうが圧倒的に多い。これは、民主主義社会では資本主義が作り出す格差の拡大が認められず、競争的資本主義が民主主義によって支持されるためには、何か格差を小さくする制度的措置が必要になることを含意する。20世紀の歴史はこの資本主義と民主主義の矛盾を解決する社会的制度設計として、ファシズム、共産主義、そして福祉国家の３つのアイディアを産んだともいわれる。そして、20世紀の歴史的な帰結として、ファシズムと共産主義は崩壊し、福祉国家だけが生き残ったことを私たちは知っている。

経済政策をめぐる社会思想は、よく新古典派とケインズ派の２つに分けられる。新古典派、ケインズ派とは経済学で使われる言葉で、国によってすこし異なるがアメリカを中心に話すと、新古典派は保守、ケインズ派はリベラルといわれる考え方である。もちろん、アメリカのような２大政党制において共和党は保守といわれ、民主党はリベラルといわれる。保守という言葉は、社会や家族の問題において伝統的、保守的価値観を重んじることを意味し、敏感な社会問題としては妊娠中絶や同性愛者同士の結婚に反対する立場を意味する。とくに論理的な必然性はないと思うが、傾向的に「小さな政府」を主張する人々が家族問題に保守的な立場をとることが多く、アメリカでは新古典派＝保守＝共和党とみることがある。反対に、ケインズ派はリベラルといい、民主党であるというのが伝統的な理解であった。

さて、80年代に登場した新自由主義とともに本格化したグローバル化の波は、その後順調に世界経済を成長させた。90年代に入り、日本では失われた10年、あるいは20年を経験することになって実感がわかないが、世界経済は90年代からリーマンショックが起きる2007年まで大きく成長していった。新自由主義やグローバル化の経済的成功は、アメリカの政治に大きな変化をもたらしたといわれる。それは民主党のクリントン大統領、そしてオバマ大統領が福祉国家の理想を捨て、共和党が追及していた新自由主義的経済政策を維持したことである（この点を最初に指摘したのは、アメリカを代表する政治学者で社会思想家のローティであった）。このことで、クリントン氏とオバマ氏はアメリカの社会思想的秩序に大きな混乱をもたらしたし、この混乱のなか、トランプ氏は共和党の大統領候補になり、大統領になるはずだったヒラリークリントン氏を民主的選挙で破りアメリカの大統領に就任する。

トランプ大統領の就任は、政治思想的な、あるいは経済政策的な価値観の混乱によるものでもあった。保守とリベラル、あるいは、新古典派とケインズ派の価値観が混乱に陥るとき、民主主義が機能しないことは20世紀の前半にもみられた傾向であり、同じことが21世紀の前半にもみられているとの指摘をする識者もいる。このような価値観の混乱に直面して、ピンカーやハラリはヒューマニズムへの回帰を主張するようになった。ヒューマニズムは民主主義を支える基本的な認識論であり、産業革命以来形成された現代社会の秩序を支えてきた基本的な人間観でもある。何が正しいことなのかよく分からなくなった時代に、もう一度性善説に戻り、現代社会の歴史を振り返ってみることが必要なのかもしれない。